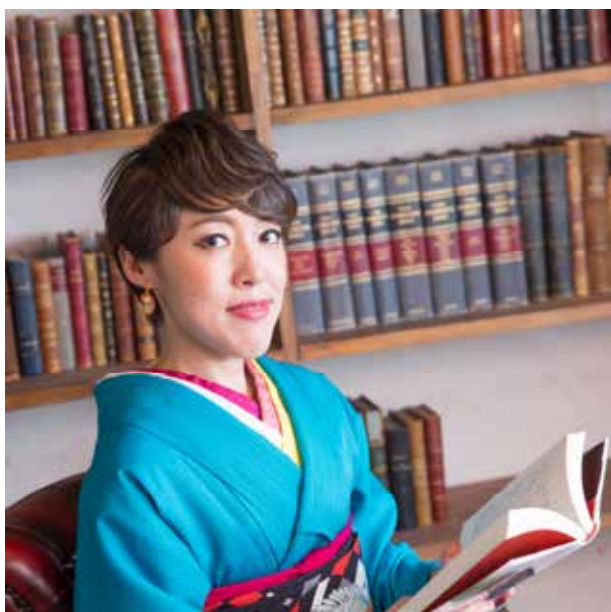


第35回 府中市男女共同参画推進フォーラム 記録誌

コロナ禍の今、
ジェンダーを考える



基調講演

あなたもわたしも生きづらい
—コロナ時代のジェンダーを考える—

東京経済大学准教授

澁谷 知美氏

2021年11月13日(土)14日(日) 開催

府中市・第35回府中市男女共同参画推進フォーラム実行委員会

第35回 府中市男女共同参画推進フォーラム記録誌

目 次

府中市長あいさつ	高野 律雄	1
実行委員長あいさつ	片山 瑚雪	
基調講演「あなたもわたしも生きづらい ―コロナ時代のジェンダーを考える―」		
	澁谷 知美	2
学生企画「見つけよう、日常の中のジェンダー」		7
講座・ワークショップ		
「働く女性応援プログラム 戦わない働き方」/i-ze		11
「みんなでメンテナンス」/じぶん de メンテナンス		12
「妊娠中のおっぱいと身体のケア・両親学級」/府中市助産師会		13
「カウンセリングってどんなもの？ ちょっとご紹介！」/NPO法人けやきの会		14
活動紹介動画より/ポスター・チラシ		15
フォーラム開催の歴史		16
実行委員のひとこと		18
参加人数とオンラインアンケート結果		20
NWEC 報告/フォーラム実行委員会等開催記録		21
男女共同参画都市宣言/奥付		

府中市男女共同参画推進フォーラムとは

男女共同参画社会の実現のために昭和61年3月に制定された「府中市婦人行動計画」を基に、翌62年、市内の女性たちがフォーラムの開催を市に要望しました。

翌63年2月に、女性問題解決のための学習や討論の場として第1回女性フォーラムが開催されました。以来、地域の人々が集い、意見交換をし、行政と共に問題を認識し、解決に向けて歩みだす「きっかけの場」として毎年開催されています。平成11年11月に府中市は「男女共同参画都市宣言」を行い、14年の第16回より「女性フォーラム」を「府中市男女共同参画推進フォーラム」と改称して、新たな一歩を踏み出しました。

府中市長 高野 律雄



本日は、第35回府中市男女共同参画推進フォーラムへご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

このフォーラムは、男女共同参画社会の実現のために、各種の催しを通じて、多くの皆様が行政とともに問題解決に向けて歩みだすきっかけの場となることを目的に、実施するイベントでございます。

昨年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となってしまいましたが、今年は開催の場をオンラインに移しての実施となります。新しいことへの挑戦も多かったことと思います。しかしこうして開催することが出来たのも、片山実行委員長をはじめとするフォーラム実行委員会ならびに男女共同参画センター登録団体の皆様方のご尽力によるものでございまして、深く感謝申し上げます。

さて、今年のフォーラムのメインテーマは、「コロナ禍の今、ジェンダーを考える」でございます。いまだに続いているコロナ禍ですが、そんな状況になって皆さんの身近なところでジェンダーについて気付かされることもあったのではないのでしょうか。また、生きづらさを感じた人もいるのではないのでしょうか。

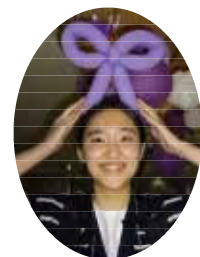
このあと、基調講演として、澁谷知美さんにご登壇いただきます。女性だけでなく、男性も生きづらいこの現代をどのように生きていくのか、お聞きいただきたいと願っております。

近年、国においては女性活躍推進法が制定されるなど、男女共同参画社会の更なる推進に向けた動きが注視されている中、本市においても、第6次府中市男女共同参画計画に基づき、さまざまな取り組みを進めているところでございます。

今後も市民の皆様と協働し、取り組みのさらなる推進を図ってまいりたいと考えておりますので、引続きご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本日お集まりの皆様のご健勝と、ますますのご活躍を祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

実行委員長 片山 瑚雪



本日はお忙しい中、第35回府中市男女共同参画推進フォーラムにご参加頂き、誠にありがとうございます。

昨年の第34回フォーラムは新型コロナウイルスの影響により、不本意ながら開催中止となりました。今年も状況を鑑みオンラインのみの開催となりましたが、開催に至ることができ、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

今年は「コロナ禍の今、ジェンダーを考える」をテーマとし、「あなたもわたしも生きづらい」と題した基調講演には東京経済大学准教授 澁谷知美先生をお招きいたしました。

「今の時代に性差別なんて存在しない」「ジェンダー平等を求め、女性の権利ばかり主張するのは逆差別だ」などの主張を耳にすることがあります。私はこうした認識の背景の一つに、自分の生きづらさや抱えている問題を言語化し、他者と共有することを良しとしない風潮があると考えます。つまり、ジェンダーによる差別も不平等もないのではなく、見えにくくさせられているのだと考えています。

今回、澁谷先生のお話を通じて、自分の生きづらさはどこからやってくるのか、また他者はどのような問題を抱えているのか、など多くの気づきを得、今一度ご自身の経験や社会を振り返っていただきたいと思っております。そして、これらは誰かの話で誰かが解決すればよい問題ではなく、実は、身近な問題であることをご理解いただき、家族や友人など多くの方と話し合うきっかけにいただければ幸いです。

基調講演のほか i-ze さん、じぶん de メンテナンスさん、NPO 法人けやきの会さん、府中市助産師会さんの4つの講座と、本年より新たに実行委員に加わった学生委員を中心に準備して参りました参加者の皆様との座談会型企画も予定しておりますので、是非併せてご参加ください。

基調講演『あなたもわたしも生きづらい -コロナ時代のジェンダーを考える-』

講師：澁谷 知美



【講師プロフィール】

1972年大阪市生まれ。東京大学大学院教育学研究科で教育社会学を専攻し、現在東京経済大学全学共通教育センター准教授。ジェンダー及び男性のセクシュアリティの歴史を研究。著書に『日本の童貞』『平成オトコ塾-悩める男子のための全6章』『日本の包茎-男の体の200年史』など。

◆コロナ禍とジェンダー

今回の主題は「あなたもわたしも生きづらい」、副題は「コロナ時代のジェンダーを考える」です。ここでいう「あなた」は男性で、「わたし」は女性です。男性と女性の生きづらさを浮かび上がらせるのが今回のテーマです。実行委員会よりご依頼をいただいたものです。

より具体的には、「男女の格差(ジェンダー)」にコロナがどんな影響を与えたかを考えていきます。コロナは既にあった格差を深刻化した、あるいはより目に見えるものにした、というのが私の認識です。コロナで新しく生じた格差は少ないと思います。

以下では、「女性の生きづらさの正体」として、非正規雇用、ケア負担、DV被害を、「男の生きづらさの正体」として、ケアレスであること、男性間の競争関係を取り上げてお話しします。

◆女性の生きづらさの正体 ①非正規雇用

「女性の生きづらさの正体」の1つ目としてお話ししたいのは、非正規雇用です。まず現状を確認しておきましょう。1つは、2020年に女性の自殺者数が増加したことです。前年より935人(約15%)増えました。

「勤務問題」で亡くなった人が過去5年間と比べて35%も増えたのは注目すべき点です。一方で、男性の自殺者数は前年より23人(約0.2%)減りました。

背景には、非正規雇用の雇い止めやシフト減があると考えられます。非正規雇用は「雇用の調整弁」と呼ばれています。不況になったら一気に雇い止めされる。働く女性の約54%、半分以上が非正規です。一方で、男性は約22%です。非正規労働者を分母にした

場合も、約7割が女性です。非正規問題は女性問題なのです。新型コロナの感染拡大によって雇い止めが生じたことで、非正規女性が将来への不安を持ち、自殺に至った。そのように推察されます。

もう1つ、確認しておきたい現状があります。非正規雇用で働いている人が多いシングルマザーの困窮です。児童扶養手当受給者のうち、約6割の人が収入が減ったと言っています。

なぜ自殺者数が増えたり、ひどく困窮してしまったりするのか。ご存じのように、非正規女性の給与がとても低いからです。首都圏に住む34～49歳の単身の非正規女性を対象とした調査では、年収200万円未満の人が44%いることが明らかになりました。この年収で首都圏で生活するのは大変です。貯金額は10万円未満の人たちが最も多く、約3割でした。約半数が老後に貧困化するという予測もあります。

しかし、非正規の賃金水準が低いのは「世界の当たり前」ではありません。フルタイムで働いている人の賃金水準を100とした場合、パートタイムの賃金水準はどのくらいになるのかを示したデータがありません。日本は2014年で56.6。2018年で60.4。過去と比べると上がってはいますが、80超えのフランスやスウェーデンなど、他国の水準には及びません。

ここで、「なぜ女性に非正規が多いのだろう」と疑問を持たれる方がいらっしゃると思います。一言で言うと、女性は「中途半端な労働者」とみなされているからです。「中途半端な労働者」とは、家事、育児、介護などのケア労働を負担しているために、会社に長い時間を割いてくれない労働者のことで、企業目線の表現です。

女性は非正規だから、中途半端な扱いを受けるのではありません。その逆です。「女性とは、ケア労働を負担する、会社にとって中途半端な存在だ」という観念が先にあり、それゆえに非正規の仕事をあてがわれるのです。

逆に男性は、会社に長時間を捧げてくれる人です。つまり、ケア労働を負担しない人とみなされています。そのような人には「ケアレス・マン」という呼び名がついています。家事、育児、介護などのケア労働を負担してない。ケアがレスである。企業はケアレス・マンを好みます。そして正規雇用します。

企業はケアレス・マンを基準として組織されています。そのせいで、いろいろな問題が起きています。先ほど見たように、女性は非正規に追いやられ、自殺が増えたり、貧困化したりします。一方、男性は長時間労働を強いられます。過労死や過労自殺が起き、病気になる。また、ケアレス・マンでなくなった男性、つまりケア負担が生じた男性が、辞職や解雇に追い込まれます。

◆女性の生きづらさの正体 ②ケア負担

「女性の生きづらさの正体」の2つ目はケア負担です。コロナで女性の家事負担が増えました。東京都の調べでは、2019年と2021年のデータを比較すると、女性は家事時間が20分増えました。男性は1分しか増えていません。

同じ調査で、平日の在宅時間のうち仕事以外、つまり家事、育児、趣味、睡眠等に割ける時間が増えたか、という問いも聞かれました。すると、男性は約47%の人が増えたと回答した一方で、女性は32%でした。男性の方が仕事以外に使える在宅時間が増えたという人が多かったのに、家事時間は増えませんでした。

「テレワークできる人が男性に少ないのではないか」という指摘があるかもしれません。それに答えておくと、被雇用者のテレワーク率は男性の方が高いです。男性は約29%、女性は約16%です。女性の方がサービス業などの実際に現場に行かねばならない仕事に就いている人が多いので、このようなテレワーク率の差が生じるという指摘があります。

女性たちはこの家事負担の増加をどのように受け

止めているのでしょうか。心理カウンセラーの大野萌子さんのもとには、コロナ禍以降、ケア負担が増えた女性たちの悲鳴が寄せられています。「夫が在宅となり、1日3回の食事作りを毎日するのが苦痛」

「夫も子どももいるのに、どうしようもない孤独を感じる」など(1)。ここから、女性のケア負担増加の要因として「家族の在宅」が挙げられるということ、また、大野さんが指摘していますが、お母さんは夫や子どもからストレスをぶつけられやすいことが分かります。女性は家族の物理的なケアと精神的なケアの両方を担っているんですね。

では、夫は一体何をしているのか。2020年に配信された合同会社SNAPPLACEの記事は、「夫が在宅勤務になり、毎日家にいるが育児を何もしない」「夫はずっと家にいるが、食事の用意も掃除もまったくしない」という妻の声を伝えています(2)。夫は「家にも何もやらない」んですね。もちろんコロナで家事を負担するようになった男性はいると思います。だからこそ「1分」ではありますが家事時間が増えました。けれども増え方が顕著でなかったのは、何もしない男性が多かったからです。

「夫のほうに労働時間や在宅勤務時間が非常に長いから家事が分担できないのではないか」という疑問もあるかもしれません。この疑問には、社会学者の筒井淳也さんがコロナ以前にすでに答えています。妻の労働時間が夫より長くなっても、また、収入が夫より多くなっても、夫の家事時間はほぼ増えないことがデータで明らかになりました(3)。労働時間や在宅勤務時間が長かろうが短かろうが関係ありません。日本の男性は、頑として家事をしないのです。

この頑なさには各国比較でも確認できます。30か国の男女の家事時間を比較すると、いずれの国も女性の方が長く、男性の方が短いです。しかし日本男性の短さは30か国中1位で、1日当たり41分です。女性は224分でした(4)。

◆女性の生きづらさの正体 ③DV被害

「女性の生きづらさの正体」の3つ目はDV被害です。コロナ禍以降、DV相談が増えました。内閣府の2019年と2020年のデータを比較すると、2020年の

方が相談件数が多くなっています。2020年には、内閣府が「DV相談プラス」という相談窓口を新しく開設しました。開設に至ったのは、震災など、社会が危機的な状況に陥るとDVが増えることが経験的に分かっていたからです。

加害者と被害者はジェンダー非対称です。加害者の約76%を占めるのは男性、被害者の約76%を占めるのは女性です。「暴力をふるう女も、ふるわれる男もいるだろう」と話をまぜっ返す人がいますが、加害者には男性が多く、被害者には女性が多いという事実から目をそらしてはいけないと思います。

私たちはつい「なぜ女性が被害者になりがちなのだろう」と考えてしまいます。でも、女性を主語にするのは、問いの立て方がおかしいですね。

問われるべきは「なぜ男性は加害者になるのか」ということです。あくまで主語は男性でなければなりません。かつ、「なぜ彼らは“女性に”暴力をふるうのか」も問われる必要があります。加害者は、誰彼かまわず暴力をふるうわけではないのです。自分の男性上司に向かって暴言を吐いたり、殴ったりはしない。相手が女性だと暴力をふるうのです。

これらの問いを解くときにヒントとなるのが「マザリングへの暴力」という概念です。イギリスとデンマークで行われたリサーチに基づいた、“*Mothering Through Domestic Violence*” (DVを通じて見る母親業) という本があります。この本に基づいて日本のDV研究の第一人者である中村正さんが、「マザリングへの暴力とは、男性が甘えと依存に基づいて女性の母親役割に対してふるう暴力のこと」という旨を指摘しています。

具体例としては、子どもの前で父親が母親を辱める。夫が妻の社交を監視し社会的孤立を強いる。男性の思いどおりの性を女性に強要し、子どもをたくさんつくるなどして生殖の自由を奪う。母親に子どものしつけを押しつけ、成果がないと言って父親が母親を叱責する。「自殺する」と男性が脅して、女性のケア意識に期待する。家事と育児を男性が女性に強いる、などがあります(5)。

ここで思い出されるのは、「夫も子どももいるのに、どうしようもない孤独を感じる」という前述の女性

の発言です。彼女は家族からストレスをぶつけられて苦しんでいる。見過ごされがちですが、女性に容赦なくストレスをぶつけることも、暴力の1つとして認識されるべきなのではないでしょうか。

以上、女性の生きづらさの正体として、非正規雇用、ケア負担、DV被害を挙げました。これらをまとめると、「女性がケア負担を負っていること、負うと期待されていることが生きづらさと関係している」と言えます。

◆男性の生きづらさの正体 ①ケアレスであること

「男性の生きづらさの正体」についてお話します。その1つ目は、ケアレスであることです。「ケアレス・マン」の特徴は、誰かの世話をしないということだけでなく、自分の世話も誰かにさせているということです。これは、杉浦浩美さんの『働く女性とマタニティ・ハラスメント』(大月書店、2019年)という本からの指摘です。

ケアをしてくれる人がいないと、ケアレス・マンは途端に調子を崩します。これは既婚男性だけではなく、男女問わずケアレス・マンをモデルとして生きている人全員に起こり得ることです。

2つの現象を取り上げます。1つは、50代以下のコロナ死の8割が男性だったことです(6)。男女の偏りが出てくるのは、背景に男らしさや、男性が家事をできないことがある、と指摘されています。

コロナは、糖尿病などの基礎疾患があると死亡リスクが高まります。こうした病気に罹りやすい状況に男性は自分で自分を追い込んでいるのではないかと。つまり、男らしくあらねばという規範に沿って生き、仕事が大変でも我慢してしまう。するとストレスが溜まって、暴飲暴食をしたり、うつ病になったりする。結果として、基礎疾患にかかるのです。

もう1つは、コロナ以前から問題になっている「孤独死が男性に多いこと」です。背景には「セルフネグレクト」があると指摘されています。セルフネグレクトとは、自分で自分のケアをしないことです。

2015～2020年の間の統計で、孤独死の約8割は男性であることが明らかになりました。孤独死の66%が病死。死亡年齢は50代以下が多く、意外にも働き盛

り年齢の人が4割占めています。「働き盛り世代の男性が自分に構う余裕もなく働いている」ことが浮かび上がってきます。

こういう話をすると、「解決のためにケアしてくれる女性をあてがうべきだ」という意見を言う人がいますが、それは違うと思います。これ以上女性にケア負担をしろと言うのでしょうか。違いますよね。男性が自分で自分のケアをできる能力を身に着けるべきではないでしょうか。企業のほうも、それだけの余裕が生まれる働き方を標準にするべきでしょう。

◆男性の生きづらさの正体 ②男性間の競争関係

2つ目の「男性の生きづらさの正体」は男性間の競争関係です。コロナ前から「男の生きづらさ」の1つとして語られている「非モテ」を例にお話します。「非モテ」とは女性にモテないことです。西井開さんの『「非モテ」からはじめる男性学』（集英社、2021年）がとても参考になります。

この本の画期的な点の1つ目は、男性間の競争関係の中身を描いたことです。競争関係において男性は男性に〈未達の感覚〉を与えることが明らかになりました。具体的には、「自分は一人前の人間ではないのでは」という感覚のことです。これを男性間で与えたり、与えられたりしているということです。

未達の感覚がもたらされるプロセスの第一段階は、〈からかい〉被害です。からかいに抵抗するのは、とても困難です。あからさまな暴力ではなく、あくまで遊びや冗談の文脈でなされるからです。

第二段階は、〈自己レイベリング〉です。からかいやいじりが度重なると、「自分は駄目なやつだ」というラベルを自分で自分に貼ってしまいます。すると、自分を否定する相手が目の前からいなくなっても自分を責め、自分が嫌いになっていきます。これはとても辛いことです。

『「非モテ」からはじめる男性学』の画期的な点の2つ目は、男性間の競争関係が外部、つまり女性にもたらす悪影響を描いたことです。排除された非モテ男性は、排除する側の男性と仲よくしたい。そこで、自ら〈いじられ役〉を引き受けます。けれど、そのことによって〈未達の感覚〉と〈疎外感〉をずっと持ち

続けることになります。

すると、この辛い状況から一発逆転するために彼女を作ろうという発想に至ります。女性にケアしてほしいという期待もあります。こうして女性にアプローチしていくわけですが、それは得てして〈拙速なアプローチ〉となってしまいます。そして時に同意のない身体接触やストーキングなどの〈加害行為〉を犯します。

これを1つの図にまとめると、男性間の競争関係が川上にあり、川下に女性に対する加害行為がある。男性間の競争関係は男性間では終わらず、男性集団の外にいる女性にも悪影響を及ぼすことが明らかになりました。

以上、「男の生きづらさの正体」として、ケアレスであること、男性間の競争関係の2点をお話しました。これをまとめると、「男性のケア行動やケア精神の欠如が、自分やほかの男性、そして女性を危険にさらす」ということが言えます。

◆「社会」をどう変える？

以上を踏まえ、「社会」をどう変えるべきか、「個人（わたし）」はどう変わるべきかをお話します。

まず、「社会」をどう変えるべきか。1つ目は、非正規でも安心して働ける仕組みを作ることです。ここで注意したいのは、みんながみんな正社員になってバリバリ長時間労働したいわけじゃないということです。ゆったり働きたい人でも十分に生活できる雇用形態・賃金体系にする。あるいは失業手当や福祉も厚くするべきです。

2つ目は、女性に偏っているケア労働を社会で負担することです。ケアを有償労働化すると不安定雇用・低賃金になりがちです。ですから、ケア労働者の待遇改善も一緒に考えるべきです。また、個々の家庭で男性もケア労働を負担する必要があります。

3つ目は、DV被害者の脱暴力プログラムの推進です。加害者が1人で自分の行動を省みることは困難です。だからこそ、プロの手を借りてこれまでの行動を見つめ直す脱暴力プログラムがあります。このプログラムを広めることが必要です。

4つ目は、男子が家事能力を身につけられる教育

をすることです。それがケアレスであることの改善につながります。

5つ目は、男性間の関係から暴力をなくす教育をすることです。男の子同士のつきあいでは言葉や行動がどうしても荒くなりがちです。周りも「男の子だから仕方ない」と言って見過ごします。大人も子どもこうした認識を改めなければなりません。

◆「個人（わたし）」はどう変わる？

それでは、「個人（わたし）」はどう変わるべきか。今日の話に関しては、女性個人が変わらなくてはならない点は、どうも思い当たりませんでした。変わるべきは、非正規問題では企業だし、ケア問題は社会や男性、DV問題では男性です。そこで、「個人（わたし）」を男性と見なし、男性はどう変わるべきかをお話します。

1つ目は、男同士の暴力を見過ごさない、痛ければ痛いと言う、ということです。

こんな提案をすると、「周りの目があるから、自分は嫌だけど男らしく振る舞わなければいけないんだ」という声が必ず出てきます。けれど、自問自答してみてください。それ、本当ですか。「周り」のせいになっているけれど、選んでいるのは自分じゃないですか。男らしい振る舞いをしたほうがいろいろなメリットがあるから。自分が求めているのではなく他人に課されているのだとして男らしさを追求する態度は『男性的』自己欺瞞と呼ばれています(7)。

2つ目に、自分は加害をしていないかと省みることです。〈未達の感覚〉には、この前まで与えられる側だった人が、今度は他の男性に対して与える側に回ったりする、入れ替わり性があります。誰もが加害者になりうるということです。自分は加害をしていないか、チェックすることが大事です。

3つ目は、生きづらいのは「モテないから」か、考えることです。「俺が生きづらいのは女のせいだ、女を許さない」と考える男性がたまにいます。これも本当なのか自問自答してほしいのです。実はそれ以前に、同性によって自尊心が踏みにじられている。そういうことはありませんか。

しかし、このことに1人で気づくのは大変です。そ

こで、自助グループなどを作って、お互いに語り合い、聴き合うのが効果的だと思います。

◆あなたもわたしも生きやすい未来へ

以上の話をまとめると、生きづらさの根底には性別役割分業があるということです。現代における性別役割分業とは、女性はケアとパート、アルバイト、派遣などの不安定雇用。男性は長時間労働です。

こういった性別役割分業に沿って雇用の在り方が編成されている。あるいは教育が編成されている。そして、心の持ちよう、慣習、文化などが作られているのではないのでしょうか。

今日の話を一言でまとめると、「性別役割分業のせいで、各分野に悪影響が出ているので、それぞれの分野で改善していきましょう」ということになるのですが、でも、これって言い古されていることなのです。ずっと言い続けている人は言い続けているのだけれども、システムの方がしぶとくてなかなか変わっていかないのです。

けれども、言い続けること、変えようと努力することをやめてはいけないと思います。根気強く周りの人に呼びかけて、1ミクロンずつシステムを動かしていかないといけないと思っています。

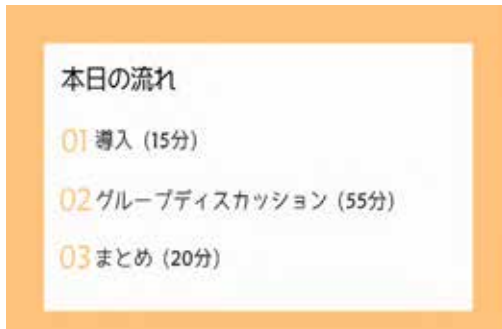
——Q&A コーナーでは、多くの方々が活発に参加してくださいました。ご参加ありがとうございました。

- (1) 週刊女性 PRIME 編集部、2021「増加する主婦の自殺、「家庭に逃げ場がない」の声 “同居あり女性”の自殺が増加する背景」週刊東洋経済オンライン、2021/07/14
- (2) 合同会社 SNAPLACE、2020「約4割はコロナ離婚を考えている？」PR TIMES、2020/05/01
- (3) 筒井淳也、2016『結婚と家族のこれから——共働き社会の限界』光文社、102頁
- (4) 本田由紀、2021『「日本」ってどんな国？——国際比較データで社会が見えてくる』筑摩書房、67頁
- (5) 中村正、2018「暴力は多様な顔をして関係性に宿ることを読み解く」『家族療法研究』35巻1号
- (6) 関口佳代子、2021「コロナ死者、50代以下の8割は男性——誰もが直面するリスクとは」『朝日新聞デジタル』2021/10/09
- (7) 小手川正二郎、2019「『男性的』自己欺瞞とフェミニズム的『男らしさ』」『立命館大学人文科学研究紀要』120号、183-5頁

学生企画『見つけよう、日常の中のジェンダー』

企画・実施：実行委員—青柳、片山、半田、古山

◆ はじめに



皆さん、こんにちは！ただいまから、学生企画「見つけよう、日常の中のジェンダー」を配信します。本日の流れは最初に導入として、時事問題を例に「ジェンダー」についてお話しします。その後、小部屋に分かれてグループディスカッションを行っていただきます。そこでは、皆さんが日常の中で感じた「ジェンダー」に基づく偏見や差別、疑問などについて共有してください。そして、最後にまとめとして各グループの代表者1名に、話し合った内容を発表していただきます。

● 時事問題①「スポーツ×ジェンダー」

今年は東京オリンピックが開催されたため、女性アスリートをめぐる問題を2点紹介します。

1つ目は、メディアでの扱われ方です。量的な問題としては、スポーツメディアにおける女性に関するコンテンツの少なさがあります。質的な問題としてはスポーツパフォーマンスよりも競技場外のこと、アスリートの容姿や私生活などに焦点を当てた報道やジェンダー役割による定義があります。そして2つ目は性的なまなざしを向けられることが多いということです。例えば露出の多いユニフォームや盗撮、性的画像の拡散があります。これらの問題は、相対的に女性アスリートが直面していることが多く、これらの例から女性アスリートの存在や女性とスポーツの関わりというのは、まだまだ男性のそれと同等視されていない現状があるということが伺えます。



● 時事問題②「就活セクハラ」



男性の方が就活セクハラの被害を受けていることを知っていますか？「就活セクハラ」とは、採用担当者が就活生に対してセクハラをすることです。具体的には、不必要なボディタッチ、「彼氏/彼女はいないの？」などの質問、「一緒に食事に行かないなら、内定を取り消すよ」という脅し等が就活セクハラにあたります。

就活セクハラの内容や就活セクハラを受けた場合の対応は、男女で異なるということがわかっています。男性に対する特有の就活セクハラは、キャバクラや風俗店への誘い・性的な言動を断ったことによる就職差別があります。これには、「男性は性に対して積極的であるべき」という価値観が影響していると考えられます。一方、「セクハラを受けるなんて男らしくない」と思われるのを避けるために、男性は女性に比べて、身近な人に相談しづらいという可能性があります。



◆ グループディスカッションの内容 (13日)

● グループ1

<就活>リクルートスーツにもっと多くの選択肢があってもいいのではないか。そのほか、就活本など就活そのものが大きな産業として成立しており、そこから受け取るメッセージが大きい。

<宝塚、アイドル>宝塚の「男性バージョン」はあるのか(歌舞伎も少し違う)。また女性が応援したい日本の女性アイドルは少ないが、それはプロデューサーなどが男性の場合が多く、また男性がファンとして想定されているためではないだろうか。

<結婚>プロポーズも婚約指輪も大抵、男性から女性に対して行われる。日本の結婚は男性が財を持っていないといけないという考え方がまだまだ強いのではないか。

<ドラマ>最近、社会的地位が高い女性を主人公としたドラマを見かけるが、そこには共同経営者など男性の姿がある。また、女性に癒しを求めるような内容もドラマで提供されており、違和感を感じる。

→メディアももちろんだが、政治が変わらなければ社会全体の流れを変えることは難しい。ただ、昔と今では変化していることも多いため、諦めずに行動していくことが大切。

● グループ2

A: 姉弟のうち姉だけ「将来困るから今から料理を練習しなさい」と言われる。

B: 祖父が料理をよくする家庭で育ったため、「料理=女」という概念は持たなかった。

C: 私の夫も、料理はきっと上手いはずなので、定年退職したら、夫にやってほしい。

B: SNSで結婚した女友達が「なんで私ばかり家事をやらなければならないの」と言う。

C: 男女ともに早い段階から料理ができるようになるのが好ましい。

A: 普段料理をする母には自分のやり方があるので、疲れていても他の家族に頼みたくないらしい。

D: 私の母は、最近「もうママをやめる」と言って、美大に通っている。家事は曜日制。

C: 私も子育てがひと段落しそうなので、大学の通信教育を考えている。

A: ママという言葉には、家事や育児といった意味合いも含まれている。

E: 自分の一人称は「僕」であるが、周りはそれを受け止めてくれている。

D: ビジネスの世界では、「私」は男女両方に使える。

● グループ3

G: 自治会の会長は、歴代男性であると思った。「子ども会」のリーダーも、親がまずは男児に打診する。男児が嫌がる場合は、女兒に任せるという慣習がある。

G: 例えば「佐藤さん」と呼ばれても、名字だけでは性別の判断が付かない。「名字を呼ぶ」ことをルールにした小学校が数十年前にあった。入学式で親たちはザワついた。

F: ランドセルの色が、性別にかかわらず選択できる、今の子を羨ましいと思う。さらに、茶色やオレンジ色といった、赤黒だけでない色のバリエーションも増えている。

F: 「世帯主」や「保護者」は男性、つまり夫側の名前を書く暗黙のルールがある。

G: 解決策として、自分が記名するときには、女性の名前を書いてみたらどうか。母親の名前でも、妻の名前でも。または、記名を求める側が、ルールとして「性別は問いません」と明記する案もある。

H: 賛成。記名を求める側に、記名をする側がアクションを起こして気づいてもらうことが重要。





◆ グループディスカッションの内容 (14日)

● グループ1

<ミスコン、ルッキズム>一部で廃止の動きもあるが、まだまだミスコンを実施する大学は多く、ワンピースに「女性らしい」ポージングで映った女子学生の写真をみると複雑な気持ちになる。また、某雑誌の表紙や車内広告などルッキズムを助長する広告が身近に存在している。

<結婚>男性側にのみ「彼女を幸せにしてあげてね」という言葉がかけられることが多く、世間からの主婦への眼差しと主夫への眼差しは同等ではないと感じる。また若い人の保守化傾向が見られるが、性別役割分業や専業主婦になることのリスクは問われていない。

<性教育の乏しさ>生理や澁谷先生のご著書にある包茎などはタブー視されてきた。その背景には性教育の乏しさやメディアによる欠落感の植え付けがあると思われる。

→人々の間に分断が生まれているため、ジェンダーに基づく問題や変革の意識が問われにくいのではないか。また、勉強していてもジェンダー平等の観点からふさわしくない発言をして後悔することが多く、まだまだ学び続けなければならないと感じる。

● グループ2

A: スポーツ選手の容姿にしか興味を持っていなかった時期があり反省をしている。

B: スポーツ記事はほとんど男性アスリートについて書かれている。

A: 男女差別的な発言があった時に、反論できない時があつて悔しい。

C: バイト先でのレディーファーストに困っている。

D: レディーファーストをしなければ、と男性はプレッシャーになっているのではないかと。

B: 男の人というだけで警戒心をもってしまうのはいけないと自分に言い聞かせている。

D: ただ、無防備でいると実際に性犯罪が起こった時の被害の大きさが変わってしまう。

C: 私は割と違った考えや悪いできごとすんなりと受け入れられる。

A: 私は逆にすぐに受け入れられないタイプである。自分でじっくり考えることが多い。

D: 勉強した上で、受け入れられないという人たちも社会は受け止めないといけない。

A: LGBTなどの活動には、価値観の押し付けを強く感じてしまうものもある。

● グループ3

E: 下ネタや女性軽視発言に反対しない人もジェンダー非対称な体制を温存させる。

E: 全ての男性が加害者という訳ではないが、自分(男性)と加害者を切り離して考えることは、女性の二次被害につながる可能性があるとも思った。自分のマジョリティ性(不平等な社会の仕組みの中で優遇されている側であること)について考えたい。

F: Eの視点を聞いて、自分が男性全員に偏見を持っていることに気づいた。エレベーターで男性と2人きりになると「怖い」と思ってしまう。これは相手を傷つける。

G: 相手の立場に立ってみること、1つの視点だけを見ないことが大事であると思う。

H: メディアも複数の視点を持たず、分断を煽る報道があるから気を付けたい。

E: 自分も加害者にならない、それを強く念じた上で、自分ではない誰かの存在を気にしようと思った。皆で考えることができ良かった。

H: 偏見といえば、選挙カーの声は女性なのに、焼き芋カーの声は必ず男性の声が使われる。





◆ まとめ

「みんなでがんばった準備から本番まで」

参加者の方とのディスカッション企画というものが初めてでした。そのため、どのような導入にするか、どのように場を作れば話しやすいかなど、いろいろなところに気をつけて準備しました。その結果、参加者のかたも実行委員もみんなが満足できる企画になってよかったです。

「空気に抵抗する」

語る時のルールとして、「相手の話を否定しない」を設定しました。これを「全肯定する」と誤解される方はおらず、賛成できない場合は「そういう意見もあるよね」と認めた上で、発話者と別の、自分の見方や経験を示してくださいました。ジェンダー（だけでなく政治、弱み、将来も同様かもしれません）について「積極的に喋るべきではない」と沈黙を促す空気が流れる現在に必要な、穏やかで、身構えることのない、語る場になったと思います。

「あなたもわたしも生きづらい社会の先」

様々な年代の方々とお話することができたので、将来の自分に関わってくるであろうジェンダーの問題について身近に感じ、考えることができました。問題ばかり考えると将来が暗いように感じますが、今生きづらさで溢れているからこそ、率先して相手を思いやることが思いやりの連鎖となり、明るい未来を切り開いていくのだと思います。

「90分、あつという間でした」

私はジェンダーについて知れば知るほど、自分の視点や考えが広がっていくと感じる一方で「知らなければあれこれ考えず、今より楽しく過ごせていたかも知れない」とも感じています。ただ今回、参加者の方の着眼点や考えに刺激をいただいたとともに、皆さんからの共感が励みになり、有意義な時間を持つことができました。ありがとうございました。

◆ アンケート（回答者数：13名）

1. **満足度**：「とても満足」76.9% 「まあ満足」23.1%
2. **満足度の理由**：自分と同年代の人々がジェンダーについての講座を企画しているものに触れる機会がなかなかなかったのも、とても新鮮でした！また、会自体も結構若い方が多かったのも驚き、それがまた楽しさにもつながりました！／少人数でディスカッションでき、集まったメンバーがとても良い方たちで楽しかったです。／男性はジェンダーについて考えていると、なかなか自分の認識が女性視点でどの程度理にかなっているのかを確認しにくいので、（メンズリブ的には、女性に答えを求めに行く前にまず男性同士で話し合え、ということらしいです。一定の説得力はありますが、話題を共有できる同性がいないと内向的な思考に陥りやすいというデメリットもあります）今回意見の共有の機会を頂けたことは非常にありがたかったです。
3. **学べたこと**：「他の人とジェンダーについて議論する場を持てた」100% 「他の人のジェンダーに関する話を聞いて共感できた」84.6% 「ジェンダーの知識を身につけられた」46.2%
4. **ご意見**：コロナ社会なのでどうしようもないですが、企画したみなさまなどとももう少しお話したかったです。おそらく、対面だと、会がお終わった後に少しほかの人と話せたのかなと思いました。／もう少し時間があってもよかったです。／身近な人でもなかなか話題に出すことが憚られますので、話せてスッキリしました。／自分自身が40代で男性なので、自戒を込めてではありますが、特に40代以降の男性達にもっと勉強してほしいと思います。



『働く女性応援プログラム「戦わない働き方」』



講師：美濃部 裕子
企画：i-ze (いーぜ)

i-ze(いーぜ)副代表 キャリアコンサルタント

- ・ドリームマップ普及協会認定講師
 - ・アドバンストスタイル認定ファシリテーター
 - ・生きがい研究員/IKIGAI MAP 認定ファシリテーター
- 大学と人材会社での勤務経験を活かし、就活学生と女性を支援

■フォーラム参加理由

働く女性の理想とするライフスタイルは、2016年以降「家庭と仕事の両立」及び「再就職」がそれぞれ50%を超えており、さらに「両立」は1992年の調査開始以降一貫して増加傾向にあります。一方、出産退職する人の割合が増加しているというデータも出ています。また、介護離職者の8割が女性でした。

このように働きたくても退職せざるを得ないような状況にある女性には、女性だからこそできる考え方で自分らしく働き続け、人生を楽しんでほしい！と考え、2019年から定期的にこのプログラムを実施していました。少しでも多くの女性に届けたいという想いで、この度のフォーラムへの参加を希望いたしました。

■プログラム概要

トレッキングシンキング™の考え方とバンデューラ理論をベースにしたプログラムを通して、働く女性の自己効力感を高め、自己実現に貢献することを目指しています。コーチングやファシリテーションスキルを用い、参加者同士の対話とカードを使用したワーク他で、参加者自身が考える理想的な働き方と前向きな思考への気づきを促進させます。

■実施してみた

同一内容で2日間、オンラインで2回実施しました。参加者は20代～50代の女性。

開始時に参加予定のかたが揃わなかったためスタートが遅れたことと、参加人数4名での時間設定をしていたところに6名の参加がありましたので、ワーク設定の変更が必要になり、予定通りの時間進行が出来ず時間がオーバーしてしまいました。次の予定がおありとのことで、最後まで受けていただけなかったかたには申し訳なく感じております。残念ながら何もおっしゃらずに退室なさったかたや、オンライン特有のトラブルもありましたので、初めからもう少し長めの時間設定をすべきでした。

いただきました事後アンケートによりますと、概ね満足していただけたようですので、安堵いたしました。ひきこもり気味の方や、適応障害の方もいらっしゃいましたが、講座終了後の参加者のみなさんの笑顔は今回も素敵でした。やはり、これからも少しでも多くの女性に届けたいプログラムです。コロナ禍が少しおちつきましたら、次回は通常の対面形式での実施を考えております。

■おわりに

この度は貴重な機会をありがとうございました。初めてのフォーラム参加ということで勝手がわからず、さらにコロナ禍でのオンライン開催ということで戸惑うことが度々ありましたが、事務局のかたには丁寧な対応をしていただきまして、感謝申し上げます。今後も、女性たちがライフイベントと共に働き続けられることを目的としたプログラムの実施を通して、女性が活躍する社会に貢献していきたいと思っております。

『みんなでメンテナンス』



講師：下沢 久恵

企画：じぶん de メンテナンス

講師紹介 (写真右から2番目)

健康運動指導士、健康運動実践指導者、障がい者スポーツ指導員。

成城大学トレーニングセンター及び横浜市営トレーニングジムに勤務しながら、府中市の介護予防運動やストレッチ教室などの講師として活躍されています。

市民活動研究会として大人の女性向けに、仕事や家事、育児で溜まったからだの不調を、ストレッチや軽い運動を行うことで改善するという目的で「からだメンテナンス」講座を始めて10年以上。「じぶんで」からだを整えることで、いきいき生活できたらいいな、という願いを込め、今年度から団体名を「じぶん de メンテナンス」にリニューアル！講師は引き続き、確かな指導力と気さくな人柄の運動指導士、下沢久恵先生です。今回、初めてオンライン配信に取り組むという、IT 初心者の私たちにとっては一大プロジェクトに挑戦しました。対象も多くの方が参加できるよう、第1部は子どもと一緒に、第2部は大人ひとりで参加できる講座としました。

第1部は、会員のお子さんがモデルとして参加してくれました。タオルを使って引っ張り合ったり、丸めて投げ合いっこしたり、コロコロ転がったり。最後は背中合わせで立てるかな？子どもも大人も笑って楽しく遊びながら「あれ？いつの間にかできちゃった！」という内容。「スポーツが苦手な子にも、『運動（からだを動かすこと）って楽しいんだよ』ということを体感してほしい」という、下沢先生の温かい思いが込められていました。

でもこれって実は、大人でも同じこと。難しいトレーニングではなく、じぶんのからだを正しく知って無理なく動かしてあげるだけで、日常生活が楽になる、という下沢メソッドが込められた大人向けの第2部。肩こり、腰痛…等々、まずは今の自分のからだの不調を確認します。例えば肩こり。「腕はどこから？」「え？肩からでしょう？」筋骨格図を見せてもらうことで、自分の体の構造を確認することができ、腕の筋肉はどこにつながっていて、どの関節が動いているか、どうやって体を動かしているかイメージし易くなります。肩が痛いからと、肩をいきなり回すのではなく、指先から始め、腕、首、胸、腋の下など徐々にほぐしていくことで、肩の動きが滑らかに！同様にお腹や背中もほぐして、講座が終わる頃には、肩こり、腰痛…、あれ？軽くなっている！からだだけでなく、こころも軽くなります。

参加者と会員の声です。

「娘は、先生面白いね！と喜び、親子で楽しんで体を動かせました。」

「朗らかで楽しい先生や仲間とともに、丸4年講座を続けています。」

「肩こり、腰痛、冷えなど、誰にでも起こる不調のほぐし方を教えていただき、家族にも伝えられるので、とても得した気分になります。」

「通って数年。冷え性が改善し、冬はカイロなしでも過ごせるようになりました。」

これからも、じぶんのからだを知って、楽しく動けるためのメンテナンスを続けていきたいと思います。

『妊娠中のおっぱいと身体のケア・両親学級』

講師：遠藤 恵子、田辺 知美

企画：府中市助産師会



遠藤恵子・田辺知美（助産師、府中市助産師会所属）
 府中市の健診事業、赤ちゃん訪問事業等に日々携わっています。
 助産師歴30年余。遠藤は産後のママ達の仲間作りに奮闘中。
 田辺は市内で母乳育児相談所を営んでいます。
 府中市助産師会は赤ちゃん大好き、ママやパパを応援したい助産師の
 集りです。いつでも皆さんに寄り添っています。

私たち府中市助産師会では「妊娠中のおっぱいと身体のケア・両親学級」と題して初のzoom講座に挑みました。これから出産を迎えるパパとママに「胎教のDVD」を見て頂きその後助産師からのアドバイスとして妊娠中のおっぱいと身体のケアについてお話ししました。

「胎教のDVD」は妊娠中にお腹の赤ちゃんに話しかける実際の様子や実験での反応そして出産、産後のパパママ、赤ちゃんの様子がわかりやすく映像にまとまっています。妊娠中にお腹の赤ちゃんに話しかけ、思いを寄せることの楽しさと大切さを感動を持ってお届けできました。「赤ちゃんへの話しかけ、早速今日からやってみます！」というお声も聞かれました。

「妊娠中のおっぱいと身体のケア」では、日々助産師としてママたちにケアを行う中でぜひお伝えしたい妊娠中のセルフケアについてお話ししました。オンラインでも伝わりやすいよう乳首の模型とパワーポイントを用いました。視聴されたママパパは出産そして産後の母乳育児に向けての妊娠中の身体の準備のポイントを、改めて実感されたようです。

初のzoomでの講座であり、講座の対象が妊娠中の方であったため情報の周知や集客が難しかったり。オンラインということでのアクシデントも多少はありましたが、フチュールの担当者の皆様に助けをいただき、とても有意義な講座となりました。ありがとうございました。

これからもプレママパパ、子育て中のご家族そして赤ちゃんを応援していく、府中市助産師会です。

妊娠中のおっぱいのケア

1. ケアの目的
2. ケアの方法
3. 行う時期



妊娠中の身体のケア

1. 身体を冷やさない
2. なるべく温かい物を食べましょう
3. 階段に工夫を
4. 適度に体を動かして
5. しっかり寝ましょう
6. 楽しく過ごす、リラックス



『カウンセリングってどんなもの？ ちょっとご紹介！』

ワークショップナビゲーター他出演者：NPO法人けやきの会会員

企画：NPO法人けやきの会



出演者プロフィール：公認心理師/社会福祉士/シニア産業カウンセラー/キャリアコンサルタント等々様々な資格を活かし、学校や社会福祉の現場での個別相談や企業向け研修・セミナー等を通じて個々人ができるだけ自分らしく生きられるようこころの健康のサポート活動を行っています。

昨年(令和2年)から国内のみならず世界的にまん延しているコロナウイルスは、私たちを取り巻く環境をその生活スタイルを含め否応なく大きく変化させ、予防のための三密回避に始まり、外出自粛や多人数での集まり抑制、仕事面でのリモートワーク導入等々間断のない緊張と試練を私たちに強いてきました。

その緊張と試練に伴って様々に揺さぶられ、時にどうしたらよいかとの迷いから抜け出せなかつたりする私たちのこころ。このような環境だからこそ知ってほしいカウンセリング、専門家へ相談することの効用。というわけでオンラインワークショップを通じて、カウンセリングの実際、その一端をご覧いただきました。

そもそもカウンセリングとはなんでしょう

ナビゲーターから「カウンセリングの基本はご相談者の語ることに耳を傾けることであって、ご自分のこと、お仕事のこと、ご家族のこと、身近な迷いや悩み、葛藤などをご相談者の個性や生き方、価値観そして意志や感情を尊重しつつお聴きし、その方自らが実は持つ力を十分に発揮できるようお手伝いしていくこと。そしてご相談者の秘密を守ること」等が語られます。カウンセリングは各自の人生経験や価値観ではなく、専門的な学習や訓練に基づいていることにも触れていきます。

コロナ禍でもストレスを溜めないことで少しでも自由に主体的に豊かな気持ちで生活が送れるよう、気持ちの整理やキャリアの見直し等々、もっと気軽にカウンセリングを捉えてほしい旨、そしてカウンセリングの実際が画面上に展開されていきます。

カウンセリングはどのように始まり、進んでいくのでしょうか～ロールプレイ～

今回の相談事例は「コロナ禍でワクチン接種はすませていても感染が心配で、三密回避を守り外出を自粛、子ども夫婦とも施設入居の親とも会えず、お連れ合いとの二人っきりの生活に閉塞感が募り、ついイライラとお連れ合いにあたってしまう」という相談内容をもとに具体的なやりとりが進んでいきます。

画面には相談者役とカウンセラー役が二人。ご相談の内容や希望日時等から担当カウンセラーを決めさせていただきますが、なんととっても最初の一步、ご相談者との出会いをとっても大切にしていることを挨拶から始まる相談の導入から醸し出され、面談が進むにつれ相談者をご自身の感情、気持ちを自由に吐露されながら自らの考え方や物事の捉え方を振り返っていく様子が見て取れました。

終わりに当たってはナビゲーターからカウンセラー役に今回実施したオンラインカウンセリングについて、そのメリットについてインタビューの形で質問がなされ「ご相談者の都合の良い場所からのアクセスが可能な点、故にカウンセリングルームにお出かけいただくよりもリラックスされるような点」があげられ、毎日を健やかに過ごす上で役立てていただければと終了となりました。

多くの方にご視聴いただき感謝申し上げます。

活動紹介動画より

フューチャーの登録団体が動画で紹介しました。

11月1日から30日まで府中市のホームページで公開されました。

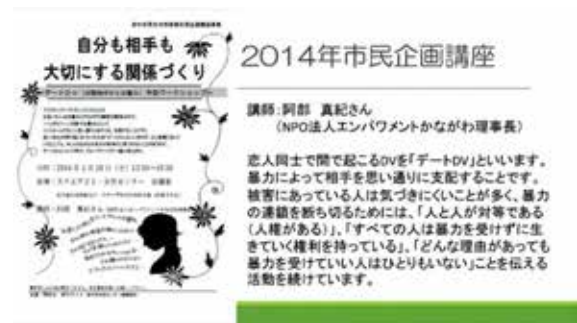
【パソコン府中WPC会】

これまでに参加したフォーラムの様子を動画にまとめました。



【府中ネット】

これまで市民企画講座で開催した内容を動画にまとめました。



フォーラムのポスター・チラシ

第35回府中市男女共同参画推進フォーラム
コロナ禍の今
ジェンダーを考える
 2021年11月13日(土) 14日(日)
基調講演 あなたもわたしも生きづらいーコロナ時代のジェンダーを考えるー
 11月13日(土) 午前10時~12時
 東京経済大学准教授 **澁谷知美氏**
 開催方法 オンライン (Zoom) 定員89名
 通信費・印刷費は参加費等各自負担となります
 要申込 氏名・住所(市区町村名)・電話番号を記載して
 Eメール (dasj@183@city.fuchuu.tokyo.jp) まで
 開会式 11月13日(土) 午前9時45分~10時
 学生企画 「見つけよう、日常の中のジェンダー」
 グループディスカッションを予定しています
 講師・講師紹介 詳細については、QRコードより
 府中ホームページをご覧ください
 主催 府中ネット
 実行委員会 府中ネット・府中市男女共同参画推進フォーラム実行委員会
 府中参画推進協議会(ネット・フューチャー)
 TEL 042-321-6080

メインポスター・チラシ

＜デザイン担当者コメント＞

澁谷先生のお着物が素敵でしたので、和風の格子柄で飾ってみました。デザインする機会を頂き、ありがとうございました。(半田)

見つけよう、日常の中のジェンダー
 学生企画
 11月13日(土) 15時~
 14日(日) 15時~
 オンライン (Zoom)
 定員89名
 通信費・印刷費は参加費等各自負担となります
 要申込 氏名・住所(市区町村名)・電話番号を記載して
 Eメール (dasj@183@city.fuchuu.tokyo.jp) まで
 開会式 11月13日(土) 午前9時45分~10時
 学生企画 「見つけよう、日常の中のジェンダー」
 グループディスカッションを予定しています
 講師・講師紹介 詳細については、QRコードより
 府中ホームページをご覧ください
 主催 府中ネット
 実行委員会 府中ネット・府中市男女共同参画推進フォーラム実行委員会
 府中参画推進協議会(ネット・フューチャー)
 TEL 042-321-6080

学生企画チラシ

フォーラム開催の歴史

(第1～15回の名称は「女性フォーラム」)

回	日時	会場	委員長	副委員長	テーマ
1	昭和 63/2/14	市民会館	佐野春江	荒木和子 佐藤法恵	私たちのあしたは… 新しいつながりを求めて
2	平成 1/ 1/29	府中グリーンプラザ	田代由美子	佐野春江 森 和子	女も男も自分らしく生きるために
3	2/ 2/4	府中グリーンプラザ	森 和子	右田房子 田代由美子	話しましょう、始めましょう
4	2/12/2	府中グリーンプラザ	荒巻ちず	赤羽美樹子 森 和子	話し合おう！21世紀に向かって —よりよく生きるために—
5	3/11/23～24	府中グリーンプラザ	関 和子	荒巻ちず 矢島千里	行動しよう参加から参画めざして
6	4/11/22	府中グリーンプラザ	矢島千里	関 和子 横山永望	まず気づこう 暮らしの中から —わたしたちは本当に自由になったか—
7	5/11/28	府中グリーンプラザ	和田安里子	岡本千賀子 中山節子	かわれ!府中の男たち うごけ府中の女たち
8	6/11/20	府中グリーンプラザ	金指光恵	三輪寛子 近藤キミ子	つくられた女から創る女へ いま、私たちの歩みは止められない
9	8/ 2/17	女性センター	浅田多津子	金指光恵 浅野明子	明日の自分を見つめよう!
10	9/2/22～23	女性センター	佐藤法恵	漆原みつほ 三輪寛子	出会うこと、学ぶことから始まる “ジェンダー・フリーって何?”
11	10/2/14～15	女性センター	漆原みつほ	佐藤法恵 須藤春子	ジェンダーからジェンダーフリーへ 女と男(わたしとあなた)同じステージで輝きたい!!
12	10/12/5～6	女性センター	岡崎妙子 白井紀子	佐藤法恵 鈴木恒代 矢島浩志	キテ・ミテ・ハナソー 女(ひと)と男(ひと)との素敵な関係
13	11/11/19 20～21 12/3/11	中央文化センター 女性センター 女性センター	小西厚子	池田房江 岡崎妙子 丸山陽子	男女共同参画宣言都市奨励事業 記念フォーラム 第13回府中市女性フォーラム
14	12/12/2～3	女性センター	鈴木恒代	西橋結花 和田安里子	ともにつくろう わたしたちのまち 「井戸端会議しませんか」
15	13/12/1～2	女性センター	小西さつき	加藤礼子 榎 初代 鈴木恒代	ともにつくろう わたしたちのまち
16	14/12/6～7	女性センター	佐藤法恵	鈴木恒代	ともにつくろう わたしたちのまち
17	15/12/6～7	女性センター	田代由美子	納村万智栄 丸山陽子	見つけませんか ともに生きる未来を!
18	16/12/11～12 12/11	女性センター 府中グリーンプラザ	岡崎妙子	鈴木和代 矢島浩志	素敵に生きよう男と女 ～私の力活かせる社会へ～

回	日時	会場	委員長	副委員長	テーマ
19	17/11/2~12/4	女性センター	岩崎真弓	鈴木恒代 穂積菜絵子	おーい！！ 来たら何かが変わるよ
20	18/11/25~26	女性センター	穂積菜絵子	五座麻紀子 佐藤麻美	「私のジェンダー調理法」 ～男は仕事、女は家庭？～
21	19/12/1~2	女性センター	笠井直美	黒澤淳子 浜田広美	いまの世の中なんか変？！ ～Let's Do it now～
22	20/11/29~30	女性センター	井沢サト子	岡崎妙子 積 優子	チェンジ！ 輝くひとへ
23	21/11/28~29 11/29	女性センター 府中グリーンプラザ	前川浩子	秋山由美子 矢島千里	くらやみからみこしをあげよう！
24	22/11/6~7	女性センター	桜井洋子	石川伊知朗 漆原みつほ	ワーク・ライフ・バランス どう生きる？どう働く！私たち
25	23/11/26~27	女性センター	漆原みつほ	小野資子 鈴木和代	ポスト3/11 本当の「豊かさ」って？
26	24/12/1~2	女性センター	鈴木和代	漆原みつほ 藤井加津子	希望をもって だれとつながる みんなとつながる
27	25/11/30~ 12/1	女性センター	藤田恵美	榎本久美子 村山鑑恵	今ッ！つながれば つよくなる
28	26/11/21~23 11/22	女性センター 府中グリーンプラザ	藤田恵美	榎本久美子 村山鑑恵	伝えあおうよ 私たちの未来
29	27/11/20~22	女性センター	高梨珠子	藤田恵美 三浦真理子	学び、気づき、その先へ！
30	28/11/19~20	女性センター	藤田恵美	漆原みつほ 田鍋浩美	男女でつくる 活躍の場
31	29/11/11~12	女性センター	向井佐知子	田中ゆかり 藤井加津子	男でもいい 女でもいい 「自分らしく」生きる
32	30/11/10~11	女性センター	田中ゆかり	高橋敦子 向井佐知子	地域で「自分らしく」生きる
33	令和 1/11/9 11/9~10	市民活動センター 男女共同参画センター	田中ゆかり	向井佐知子 岡本充子	地域で「自分らしく」生きる
34					新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止
35	3/11/13~14	オンライン	片山瑚雪	青柳江理 半田愛	コロナ禍の今、ジェンダーを考える

実行委員のひとこと

本年度はオンライン開催ではありましたが、コロナ禍においても皆様とジェンダーについて考え・学び続けることができ、嬉しく思います。実行委員をはじめ、事務局・登録団体の皆様、また各講座の参加者の皆様ありがとうございました。

また学生企画では、年代もバックグラウンドも異なる方々とお話することが出来、貴重な経験となりました。私自身、今回のフォーラムを通じて、大学では得られなかった学びを得ることができました。

ジェンダー平等とはどこかの誰かの話ではなく身近な問題であり、今後も一人でも多くの方に関心を持っていただきたいです。

片山 瑚雪



準備期間から本番、そして今までたくさんの経験をさせていただきました。学生企画では企画立案から参加者募集、アンケート作成、リハーサルと、同じ関心を持った学生委員と協働することができて嬉しかったです。基調講演では司会を務めさせていただきました。本番ではアクシデントもありましたが、実行委員の皆さんや事務局の力をお借りして、素晴らしい時間を作ることができたと思います。最後に、実行委員を通して、様々な世代・背景・立場の方と活動する難しさとおもしろさを知ることができました。

ありがとうございました。

青柳 江理



実行委員として活動させていただいた中で、「ジェンダーに関心がある人は、他人に寛容である」という結論にいたりました。ジェンダー講座に参加する人で、他人の意見を頭ごなしに否定したり、すぐ怒り出す人はみたことがないし、今回の参加者の皆さんやメンバーの中にも、そのような人はいらっしやらなかったからです。そんな心地よい環境で活動させていただいたことに感謝を申し上げます。

また、それと同時に、逆に、寛容でない人、余裕がない人にこそジェンダーに関心を持っていただきたい。そんな願いもあります。ですから、これからも性別、世代、能力関係なしに、全ての人が「ジェンダー」について考えたり話したりできる社会になるよう、活動してゆきたいと思います。

古山 夏帆



学生企画では、ジェンダーに関することでも、多岐にわたる事象があることが実感でき、人それぞれ感じ方、考え方が違うからこそ、他人の気持ちを想像し尊重することが大事であると思いました。

今回はコロナ禍ということで、オンライン開催でしたが、画面の向こうにはジェンダーと向き合っている仲間がいるということを感じられた、素敵な機会でした。ご協力いただいた全ての方々に感謝いたします。

半田 愛



コロナ禍にあつて、女性蔑視の言動や経済的に弱い立場の女性にしわ寄せがいたりジェンダー問題も一層注目されるようになりました。今年のフォーラムは初めてのオンライン講座になりましたが、「コロナ禍の今、ジェンダーを考える」をテーマに澁谷知美先生の基調講演はリモートとは思えないほどの盛り上がりを見せました。

参加団体が少なかったのが残念ですが、学生実行委員による企画として身近なジェンダーについて討議する場を持てたことは大きな成果です。

今後も若い方、男性に参加してもらえようなフォーラムにしていきたいと思います♪

向井 佐知子



初めてのオンライン開催、最初はどうなるのかと思いましたが、学生の実行委員の皆様が頑張ってくれたお陰で滞りなく開催でき、本当によかったです。実行委員、事務局、参加いただいた皆様に感謝します。

私何よりよかったのは、違う世代の人とたくさん話せたことです。特に学生企画でのお喋りは楽しかったし、刺激的でした。こんな経験、もっと多くの人に味わってもらいたい！

フォーラムは時代の変化に合わせて変わっていくものだと思いますが、その変化の道筋が少し見えたような今回のフォーラムでした。今後が楽しみです。

藤井 加津子



35回を重ねてきたフォーラム。今回は歴史に残る企画ができたと思っております。コロナ禍での初めてのオンライン開催になりましたが、実行委員に学生の皆さんが加わってくださったことで、新しい発想や知識、若いエネルギーが大きな力となりました。共に学び合えた事を企画に盛り込むことができた事は、素晴らしいことだと思います。まさしく世代を超えたジェンダーに対する考え方を共有することができたフォーラムだと思っております。今回のフォーラムに実行委員として参加させていただいたことに、心から感謝申し上げます。

田中 ゆかり



「第35回フォーラム」の画期的な第1は、学内の掲示板や広報「ふちゅう」から4名の大学生の参加があったこと。主体的に準備、当日の進行、記録誌作成も担われたことです。

「基調講演」のテーマも澁谷先生の講演も現状把握、分析、新しい視点での提言は、本当に納得でした。「学生企画」での率直な意見交換は、予想外の展開で、異年齢交流ならではの気づきを得ました。

第2は「Zoomの苦手意識」を払拭して、グループで視聴のみなさんから、先生の了解と「市」の協力を得て「DVD」化し、広く活用したいという声が上がっており、かつてない動きが起きていることです。

是非とも実現したいです。

漆原 みつほ



参加人数とオンラインアンケート集計結果

参加人数 延べ 118 人

アンケート回答者数 39 人（学生企画を除く）

住所 府中市内 21 人・市外 18 人

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
(人)	2	6	4	11	10	4	2

基調講演「あなたもわたしも生きづらい-コロナ時代のジェンダーを考える-」の感想

- ・ オンライン会議は初めてだったが、気軽に受けることが出来て良かった。
- ・ 問題点がこの コロナ禍で改めてクローズアップされ、社会問題となっていることを感じた。
- ・ 男性の生きづらさに焦点を当てたものは今まで少なかったため、とても役立つものだった。
- ・ 家族で聴いた。すっきりした気持ちになり、多くの新たな視点を得た。
- ・ 「何でも教育のせいにするな」にドキッとしたが、教育・環境を変えていかなければ。
- ・ 「全員がそうではないけれど、傾向としては〇〇が多い」という言い方が好印象だった。
- ・ 私には少々難しかった。ありがとうございました。
- ・ 先生の力強い話し方と、論理的なメッセージに胸を打たれた。勇気がもたらされた。
- ・ このところ毎年参加しているが、こんなに Q&Aが盛り上がったのは初めて。
- ・ 質問が相談コーナーのようで、所感を述べられるのは「違うのかな」と思った。

講座・ワークショップの感想

- ・ 終始雰囲気も柔らかく、途中から参加したが、暖かく受け入れてもらえた。
- ・ 少人数だったけど、かえってその方がよかった。
- ・ 時間が押しすぎていて最後まで参加できなかった。説明がたまに理解できない時もあった。
- ・ 父と母での赤ちゃんの反応の違いが見られて良かった。夫の反応も良かった。
- ・ 実際のカウンセリングの進行具合が分かって参考になった。
- ・ やり通りの模様を再現していたが、少し長く、少し同じように落ち込みを感じた。

来年度以降、企画してほしい催物（基調講演、講座、展示等）

本企画（基調講演）の続き/Zoom(カメラオフ)で参加できる体操をもう一度/「グレイゾーン」（支援が必要だけど、そのように見られていない弱者）の人同士のイベント/退職後の生きがい/子どもと大人の自己肯定感を育てる絵本読み聞かせ/やさしい日本語/自己理解、他者理解につながる講座/実生活に役立つ心理学/「こころの境界線」バウンダリーについて/女性ジェンダー教育がもたらす女性の生きづらさ/アサーティブ・コミュニケーション/アダルトコンテンツの加害性と当事者意識/男性はどうアダルトコンテンツと向き合うべきか/「彼女を幸せにしてあげて」と言われる結婚モヤモヤ/夫婦の不平等/幸せはどちらか一方が努力するものか/LGBTQ とハラスメント/女性かつ障害者などダブルマイノリティについて

2021 年度

NWEC 男女共同参画推進フォーラム参加報告

国立女性教育会館（NWEC）が年に一度開催する男女共同参画推進フォーラム、今年はオンラインで行われました。実行委員会では、基調講演と鼎談を視聴しました。その主な内容をご紹介します。

12月2日（木）10:00~11:00

基調講演「危機の時代のジェンダー平等」

講師 中満 泉（国際連合事務次長・軍縮問題担当上級代表）

中満さんは、日本人女性として初めて国連事務次長に就任され、山積する困難な課題に第一線で取り組んでおられます。

講演では、「グローバルな危機にある今、SDGsへの取り組みの最も効果的な方法がジェンダー平等の実現である」「ジェンダーの視点から安全保障を分析することが平和と安定のために効果的である」「AI設計においてジェンダーバイアスを取り除くことが必要」など、危機の時代にこそジェンダーの視点が重要であることを強調されました。

講演の最後のメッセージをここにご紹介します。

「ジェンダー平等は達成可能であることを強調したい。日本の固定観念と政策を変えてジェンダー平等を加速するために、もっと多くのことがなされる必要がある。今日、日本の権力が高齢男性に握られていることは全く賢明なことではない。幅広いグループから男女双方が関与する必要がある。鍵は、目標設定とともに明確な戦略と計画を立てること。あらゆるレベルで説明責任を求め、行動を起こしていくこと、反対の声を上げることを提案したい。日本の、世界の継続的な繁栄はジェンダー平等と多様性にかかっているのです。」

12月11日（土）13:30~15:00

鼎談「社会を変える——ジェンダー平等の「壁」を乗り越えるために必要なこと」

白波瀬 佐和子（東京大学大学院 人文社会系研究科教授）

田瀬 和夫（SDGパートナーズ（有）CEO）

谷口 歩美（#みんなの生理 共同代表）

社会にはジェンダーにまつわる「壁」がたくさんあります。見える壁もあれば、見えない壁もある。壊してきた壁もあれば、とても乗り越えられそうにないような壁もあります。そんないろいろな「壁」について、世代も立場も違う3人が率直に語りました。

コロナ禍は、もともと存在したジェンダー問題を顕在化させましたが、乗り越えるために必要なことは、「能動的な関わりの大切さ」、「すべての性が向き合う、議論する、想像する、思い切る」そして「日々の実践」という意見が出ました。意識が変わるのを待っていたら何も変わらないので、考えて行動することが必要だと感じました。



実行委員会等開催記録

回数	日付	協議・検討事項等
1	3月23日	実行委員自己紹介
2	4月13日	委員長等役員決定、フォーラム開催日・構成・テーマの検討、基調講演の講師
3	5月18日	フォーラムのテーマ決定、基調講演講師決定、登録団体・一般参加団体の募集
4	6月30日	団体募集要項、基調講演タイトル決定、ポスター・チラシ
5	8月11日	基調講演、ポスター・チラシ、学生企画の内容
6	9月5日	ポスター校正、学生企画の内容
7	10月11日	当日の役割分担、学生企画の内容、記録誌の仕様等
8	10月24日	当日の役割分担決定、基調講演の詳細確認、アンケート項目検討、記録誌の仕様等
11月13日、14日 府中市男女共同参画推進フォーラム		
9	11月23日	記録誌の仕様決定、記録誌の分担決定
10	12月11日	NWECフォーラム視聴、フォーラムの反省・感想
11、12	1月~2月	記録誌作成作業
13	3月	記録誌完成報告、決算報告、来年度のフォーラムに向けて

男女共同参画都市宣言

わたしたちは、歴史にはぐくまれたふるさと府中を誇りとし、性別を超え、世代を超えて、互いに人として尊重し合い、共にいきいきと輝くまちをつくり続けるために「男女共同参画都市」を宣言します。

- 1 わたしたちは 男女が共に 社会のあらゆる分野に平等に参画するまちをつくります
- 1 わたしたちは 一人ひとりが自立し 認め合い 心豊かに暮らせるまちをつくります
- 1 わたしたちは 職場・地域・家庭において 男女が共に責任を分かち合うまちをつくります
- 1 わたしたちは 国際社会の一員として 平和を愛するまちをつくります

平成11年11月3日

府 中 市

第35回 府中市男女共同参画推進フォーラム記録誌

編集&発行 府中市・第35回府中市男女共同参画推進フォーラム実行委員会

発行日 令和4年3月

連絡先 府中市男女共同参画センター「フューラル」

〒183-0034 府中市住吉町1-84 ステージャ府中中河原4階

電話 042-351-4600 FAX 042-351-4603